

聖書の祈りが私の祈りになる（新約編）

第12章 祈りについてのパウロ その2②



神の満ち満ちたさまを受け取る

パウロが物理的に置かれていた環境と彼の祈りの内容を比べてみると、素晴らしい洞察が得られます。エペソ書を書いているとき、彼はローマで軟禁されていました（エペソ 3:1,13 を参照）。訪問客を迎えたり、若干の自由のもとで出歩いたりという特権があったとはいえ、彼は常に監視下にありました。彼が完全な自由を求めて声高な祈りを捧げていても、非難はできないことでしょう。ところが、彼がもっと関心を抱いているのは、人々が罪から解放されることであり、彼らの信仰が成長することなのです。キリストを知らない人々の置かれている束縛に比べれば、自らの置かれている物理的な制約など無に等しいことだったのです。

こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります。どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいますように。こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように。また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができるようになります。こうして、神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように。（エペソ 3:14-19）

エペソの人々のための祈りとしては二番目の、パウロのこの祈りでは、上を目指した前進、すなわち、「**神ご自身の満ち満ちたさまにまで、あなたがたが満たされますように**」という究極の状態に向けて、一步一步進んでいくさまが見られます。教会の霊的な進歩に対するパウロの情熱が、これほどはっきりと現れている箇所はありません。彼の願いには、心に大切に抱いているその目的だけでなく、揺るがされることのない確信も見られます。そして、その確信とは、神が与えてくださる時にのみ得られるものなのです。神の同じ働きを求めつつ、同様の確信を抱いて祈るまで、私たちは神の願っておられる栄光に満ちた高みに至ることはできないのです。

「**ひざをかがめて**」（14 節）という表現は、次の二つの形、すなわち、①**祈る際の自分の体の姿勢について語っていた**、②**神に対する心の姿勢を描写していた**、のいずれかにも理解することができます。文化によっては、自分よりも高い地位にある人々への敬意を示すには、その人の前では座るよりも立つという所があります。別の文化では、人々から高く評価されている人の前では、お辞儀をしたりひざまずいたりするのが適切な体勢である所もあります。神は、滅ぶべき他の存在よりも軽い敬意をもって取り扱われるべきなのではないでしょうか。そのようなことはありません。ただ、体の姿勢もさることながら、パウロがここで関心を抱いているのは、心の態度です。

どちらにしろ、主の御前でひざまずくというのは、神に畏敬の念と聖なる恐れを抱きつつ近づき、真心からの真剣な祈りを捧げることだ、ということが示唆されているのです。



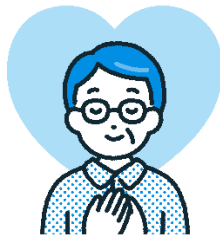
パウロは先の祈りでは、神を「私たちの主イエス・キリストの神、すなわち栄光の父」(エペソ 1:17) としていますが、この箇所では単に「こういうわけで、私はひざをかがめて、天上と地上で家族と呼ばれるすべてのものの名の元である父の前に祈ります」(3:14-15) としているだけです。パウロはこの箇所では、既に天にあらうが、まだ地上にあらうが、一つの家族を構成している人々、その名が神に由来し、神をあらゆる必要を満たしてくださる方として見上げている人々として、献身的なクリスチャンの共同体全体を強調しているのです。

この祈りにおける四つの願いはみな、相互に関連し合っており、それぞれが先行する祈りを拡大していくものとなっています。私たちは一つの強力な上り調子の中で、これら四つの願いを通じて前進していければと望むものですが、それは、あたかも一日で幼児から成人になることにもまさって不可能なことです。「子どもは徐々に成長していかなければならず、輝かしい上昇をもたらすリフトのようなものも無い。……各ステップは「that」によって導入されており、それぞれの「that」が、その上り調子において次のステップを可能にする条件を示しているのである。その上り階段には、迂回路も無ければ、中途からの出発も無い。次の一段に登るためには各ステップが必要なのであり、今の一段に至るにはその前の一段にかかっているのである」。

パウロの最初の願いは 16 節にある。「どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいように」。ここで「従い」(ギ：カタ) という表現は、エペソ書だけでも少なくとも 15 回は現れている言葉ですが、この箇所では測定の方法を示唆しています。すなわち、内なる人の必要としているものを与えてくださることのできる能力が、神ご自身の力の源、その栄光の豊かさによって測られているのです。天におけるこのような交換方法は、地上の何にもなぞらえることはできず、地上の通貨もまた、内なる人に必要な力を買収することはできません。全能なる方の豊かさは、金 (gold) によってではなく、栄光 (glory) によって測るものなのです。金は、一時的で滅びゆく肉体の必要を満たすことはできるかもしれませんが、永遠の時間を生きる魂の必要を満たすのはただ、栄光だけです。内なる人の必要とするものはいずれも、「その栄光の〔著者注：無限の〕豊かさに従い」得られるものなのです。そこでパウロは、自分の内なる存在が必要とするものはすべていただきたいと求めています。十分なだけ以上にいただけるというパウロの確信は、神の輝かしい豊かさが無尽蔵に存在しているという点にあります。私たちにも、同じものを求めてよいという特権が与えられているのです。

パウロにとって祈りとは、内なる人が圧倒的なまでに必要としているものを、その供給源――神の栄光の豊かさ――に結び合わせるということでした。彼が特に意識しているのは、その必要に答えてくれるものである栄光の豊かさに特有の一つの側面、すなわち神の力です。クリスチャンは、神の御霊のもたらしてくださる奇跡的な力によって強められるのです。

パウロの第二の願いは、17節前半に見られます。「**こうしてキリストが、あなたがたの信仰によって、あなたがたの心のうちに住んでいてくださいますように**」。先行する第一の願いが、神の究極に向けての階段において、私たちを次の一段へと引き上げてくれるのです。「住む」（ギ：カトイケオー）とは、「**家とする**」「**滞在すべく落ち着く**」「**永続的に住む**」という意味です。キリストが私たちの心に永続的に住んでくださるまで、「**神ご自身の満ち満ちたさま**」へと迫る愛への途上において、前進はほとんど見られません。「信仰によって」は、偶然ここに含まれているではありません。「**人間と神の間のあらゆる関係は、この基盤に支えられている。アブラハムは、その信仰により、幕屋に住んだ。キリストは、私たちの信仰により、私たちの心の内に住んでくださっているのである**」。キリストが私たちの心の中に住んでくださっているという現実は、人間の力や決意によって可能なのではなく、ただ聖霊が私たちの祈りに応えてくださることによってのみ可能なのです。



パウロの第三の願いは、17節の後半から19節まで続いています。「**また、愛に根ざし、愛に基礎を置いているあなたがたが、すべての聖徒とともに、その広さ、長さ、高さ、深さがどれほどであるかを理解する力を持つようになり、人知をはるかに越えたキリストの愛を知ることができますように**」。私たちはいまだ理解してはいないかもしれませんが、ここで、偉大な使徒、すなわち、自ら神を求める中で霊的な凡庸さの低地をはるか後にし、霊的な洞察と啓示の高みに至った、使徒の祈りに耳を傾けているのです。彼はこの山の頂にあって、下界からは切り離され、自らの信じる大いなる神にお会いし、およそ言葉にならないその様子に恐れおののいていました。視界はもはや制限されてはいません。彼は神を仰いでいました。それは言語に絶するご栄光と美しさでした。彼はもはや、その山の麓にいたことでは満足ができなくなりました。また、今の状況を自分だけで喜ぶこともできませんでした。彼は全身全霊をもって、あらゆるクリスチャンに同じ体験をして欲しいと願っていたからです。それゆえ彼は情熱をもって祈りました。

この第三のステップは、第二のものから自然に溢れ出ています。なぜなら、キリストが内にいてくださるところ、その愛も豊かにあるのであり、私たちに無限の地平を開いてくれるものだからです。愛は即座に、魂の肥沃な土壌となり、私たちの霊的な成長と到達の基盤となるのです。「**理解する**」（ギ：カタランバノー）は、「**熱心に取り組**」「**つかむ**」「**自分のものにする**」「**所有する**」などの意味を表します。愛は、能力を与えるとともに、質を向上させる力です。愛が無ければ、私たちの霊的な手足は麻痺してしまい、神の満ち満ちたさまを体験する高みに登ることができません。それらの高みをただ遠くから、物欲しげな目で見つめるだけとなります。それらの高みは、ぼんやり捉えどころのない虹の両端のように、ただ私たちの理解を超えたところにあるだけとなるのです。限定された形でしか神が見られないということこそ、私たちの一番のハンディーです。神の偉大さは、壮大ながらも遠方にある山の頂のように、目の前にぼんやりと浮かび上がってはいるのですが、その山麓にすら足を踏み入れることはほぼかないません。ところが、神もパウロも、口を揃えて、私たちを登らせようと誘ってくるのです。

それでは、この四次元（広さ、長さ、高さ、深さ）を表すものは、私たちとどう関係してくるのでしょうか。ほぼ確実に言えることは、これは何か、私たちの肉の目から隠されているものであるということです。これは、キリストを通して神を個人的な形で知ることのできていない人の理解をはるかに超えています。これまで、神の愛は神の測ることのできない側面であり、聖霊が私たちに理解して欲しいと願ってくださっているものだと考えている人々もありました。それも考慮の一部であることに疑いはなく、まさに次のくだり（「**人知をはるかに越えたキリストの〔著者注：きわめて著しい〕愛を知る**」）が愛そのものを強調しているわけですが、文脈を見ると、この結論はほとんど受け入れられません。神がご自分の子どもたちに対して愛の中で育てて欲しいと願ってくださっていることに、疑問をさしはさむ余地はありません。神は愛だからです。しかし、愛について知っているからといって神を理解していると思うなら、それは誤りです。「**神の愛を超えながらもそれを取り囲むことこそ、神の満ち満ちたさまである。神の広さ、長さ、深さ、高さ――神であられるもののすべてである**」。これこそ、祈るパウロが気づいていたことであり、神の家族のために祈る彼の心の中にあった関心事だったのでした。

パウロの祈りにおける最後の願いは、4節の後半にあります。「**こうして、神ご自身の満ち満ちたさまでにまで、あなたがたが満たされますように**」。これこそがまさに頂上です。聖霊により、私たちの内なる人がその力によって強められた後、キリストが私たちの心に住んでくださるようになった後、私たちが神の栄光に満ち満ちたさをいただくようになり始めた後に初めて、クリスチャンの体験における最高峰の頂が私たちのものとなるのです。かすかに下向きの力の働く平地は、はるか後方に過ぎ去っています。最後の一步は、私たちが切に願う目的地、すなわち神の満ち満ちたさまでに満たされるというところへと運んでくれるのです。これは無限のものです。まばゆい山頂であり、雲の上の光景であり、どの山よりも高くそびえ立つ山の頂です。人はこれ以上の貴重な宝を求めることはできません。地上の宝など、これに比べればなんと価値の無いものなのでしょうか。



しかしながら、留意すべきことがあります。それは、神が私たちの心の中で輝かせてくださっている光は、器の中に入れられているということです。次のようにある通りです。「**私たちは、この宝を、土の器の中に入れているのです。それは、この測り知れない力が神のものであって、私たちから出たものでないことが明らかにされるためです**」（2コリント 4:7）。

この満ち満ちたさとは、どのようなものなのでしょう。私たちの目が釘づけになり、私たちが最も切なる祈りを向ける対象です。満ち満ちたさ――それは、神の御子の姿と一致するということです。神の御子については次のように、すなわち、「**神はみこころによって、満ち満ちた神の本質を御子のうちに宿らせ**」（コロサイ 1:19）、また、「**キリストのうちにこそ、神の満ち満ちたご性質が形をとって宿っています。そしてあなたがたは、キリストにあって、満ち満ちているのです。キリストはすべての支配と権威のかしらです**」（コロサイ 2:9-10）とあるとおりです。神の満ち満ちたさまご性質とは、人の形に包まれ、この上ないほどにまで表されているのです。神がご自分の被造物に対して、それ以上に十分な形で姿を現わされることはできませんでした。なぜなら、イエスこそが「**神の本質の完全な現れ**」（ヘブル 1:3）であり、そのご性質の表現そのものであったからです。